

移動空間をデザインする ～ポンピドゥー・センターからロマンスカーへ～

プロローグ

印象派の画家、クロード・モネの描いた「サン・ラザール駅」。19世紀後半、従来の室内でえがかれた絵画の世界を飛び出し、自然の中で光と色彩を自由に表現する印象派の出現は、鉄とガラスが巨大な建築物を可能にし、「サン・ラザール駅」などのターミナルから各地へと延びる鉄道網が整備され、パリが近代的都市へと発展していく時期と重なります。この画は、そうした時代の「移動の空間」を象徴するものともいえるでしょう。

文化のターミナル～ポンピドゥー・センター

1977年にパリ中心部に完成した「ポンピドゥー・センター」。国際設計コンペにより、建築家レンゾ・ピアノ、リチャード・ロジャース、ジャンフランコ・フランキーニとエンジニアリング会社A r u pが提案したプランが採用されましたが、むき出しの鋳造パイプやガラスで形成された、あまりにラディカル（前衛的）なデザインは「石油精製工場のような」との波紋も呼びました。近代美術館をはじめ、映画館や図書館など世界で初めての総合複合文化施設として計画され、様々な企画展示を可能とするフレキシビリティを備えた広い内部空間や、この建物のシンボルともいえるエスカレーター、人々が自由に集える広場などが特長です。完成から40年を経た今も多くの利用者を集めています。

巨大な公共空間のデザイン～関西国際空港旅客ターミナルビル

海上の人工島に24時間稼動する国際空港を建設するプロジェクト。全長1700mにもおよぶ巨大な旅客ターミナルビルは、ジオメトリー理論に基づき、優雅な曲線を描く大きな屋根で覆われています。建物内の空気の流れを制御する環境技術を導入し、省エネ効果をもたらすなど、利用者にとって、巨大さに負けない、やさしくわか

りやすい空間を創出しました。1994年の開港の翌年1月に発生した阪神淡路大震災の際には、大きな損害も受けず、世界中からの支援物資を受け入れるなど、都市の防災機能として復興にも貢献しました。

鉄道車両をデザインする～ロマンスカーVSE・MSE・EXEα・新型特急・箱根登山電車アレグラ号・大山ケーブルカー

VSEは、「前面展望」「連接台車」などの小田急ロマンスカーの伝統を承継するとともに、「箱根へのときめき感の実現」という新たな課題にも挑戦しました。従来の11両編成を10両とし、パノラマ窓と相まって、水平方向にシンメトリーなデザインとなっています。また、天井高を確保し、快適な車内空間とするため、空調機器や座席等の設計にも工夫を凝らしました。先頭部の2階運転台の下に展望席スペースを生み出すために、運転士の制帽のデザインも数センチ単位で調整するなどの苦勞もありました。

MSEは、東京メトロ線に乗り入れる初の特急用車両として、地下鉄線内の安全基準や分割併合機能等、運行上の様々な制約をクリアしつつ、観光からビジネスまで、まさにマルチな活躍をイメージするデザインとし、車体色には、地下鉄線内でも映える「フェルメール・ブルー」を採用しました。

EXEは、1996年に就役した車体のリニューアルに際して、ビジネスユースを想起させるシャープなシルバーの車体色とし、車内空間は、間接照明の採用により明るいイメージとするなどの改良を施し、プラスアルファの要素を実現しました。

2018年3月の就役に向けて製造中の新型特急車両70000形は、「箱根に続く時間（とき）を優雅に走るロマンスカー」をコンセプトに、前面展望席を復活し、高さ1mの大型窓を採用するなど、沿線風景を楽しめるデザインとしました。車内

においては、座席の下の荷物収納スペースを確保するなど、居住性の向上が図られています。この新型車両がロマンスカー・ファミリーに加わることで、貴公子然とした白いVSEの車両と、「ローズバーミリオン」の車体色をまとったレディの如き車両とがペアとなって、箱根への旅に活躍することを期待しています。

箱根登山電車の「アレグラ号」は、急勾配を行き来する登山鉄道の特色を踏まえ、豊かな緑や溪谷など箱根の雄大な自然景観を楽しめるよう、床までのびる大きな展望窓を採用し、運転席後方からの眺望を確保するなど、車内にいることを意識せず、自然に包まれるようなデザインを採用しました。

大山ケーブルカーは、50年ぶりのリニューアルに際して、架線を廃止して蓄電池式へとシステムを一新するとともに、眼下に相模湾も望める山下側と、大山阿夫利神社や山頂を仰ぐ山上側と、それぞれの特色ある眺望を楽しめるよう、全く異なる前面デザインを採用しました。また、麓から大型ヘリコプターで車両を搬送したことも話題となりました。

エピローグ

これまで自身が手がけてきたターミナルや鉄道車両などの公共空間、移動空間のデザインにおいては、機能性はもちろんのこと、利用者にとって、わかりやすさ、やさしさなどのヒューマニティー（人間性）の要素を付加することを意識してきました。都市や鉄道が進化していく中で、今後とも、公共性、社会性、そしてヒューマニティーをテーマに、空間的な価値を創造していきたいと考えております。

以 上